



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 1, 2004, No. 16

【役員名簿 (2002-2004)】

代表

山里勝己 (琉球大学)

副代表

生田省悟 (金沢大学)

高田賢一 (青山学院大学)

事務局幹事

喜納育江 (琉球大学)

高橋勤 (九州大学)

会計

近江満里子 (東京工科大学・非)

小谷一明 (県立新潟女子短期大学)

監事

西村頼男 (阪南大学)

ニューズレター編集委員

上岡克己 (高知大学)

山城新 (琉球大学)

結城正美 (金沢大学)

会誌編集委員

村上清敏 (金沢大学)

石幡直樹 (東北大学)

伊藤詔子 (広島大学)

木下卓 (愛媛大学)

Bruce Allen (順天堂大学)

運営委員

コンピューターセンター

岩政伸治 (白百合女子大学)

山城新

大会運営

大神田丈二 (山梨学院大学)

小田友弥 (山形大学)

関口敬二 (大阪府立大学)

巽孝之 (慶應義塾大学)

中村邦生 (大東文化大学)

横田由理 (元広島中央女子短期大学)

吉崎邦子 (福岡女子大学)

吉田美津 (松山大学)

研究助成

稲本正 (オークビレッジ)

岡島成行 (日本環境フォーラム)

野田研一 (立教大学)

白山麓・手取川の風景



10年を振り返って

代表 山里勝己

ASLE-Japan 設立から今年で10年になる。1994年、熊本大学の正門前でお互いに顔を知らないまま何人かの方々と待ち合わせをしたことが思い出される。心細さと期待感が交錯し、人待ち顔で立っていてもだれがだれやらわからない。思い切って、隣でこれも人待ち顔で立っている方に声をかけてみた。なんと行って声をかけたかもう忘れてしまったが、その方は高知大学の上岡克己さんであった。それから野田研一さんや木下卓さん、大神田丈二さんと集まり、だんだんと仲間が増えてきてホッとしたのであった。

すでに野田さんを中心に、学会設立の準備がかなり進んでいて、わたしなどは準備の第2段階からの参加であった。熊本に行く前に、その年にフルブライト教授として立教や上智で教えていたスコット・スロヴィックさんを琉球大学に講演のためにお招きし、そのときに学会設立の準備の話などは聞いていた。スロヴィックさんが東京にお帰りになったあと、野田さんから熊本大学での設立総会に参加しませんかという丁寧なお電話をいただいた。わたしはもちろん喜んで参加しま

すとお答えした。

ASLE-Japan 設立のために熊本に集まった多くの研究者は、元来はネイチャーライティングや環境文学を専門としていたわけではない。それぞれがこの新しい学問領域となんらかの接点があったことは確かであるが、「ネイチャーライティング」や「環境文学」という枠組みで研究をしてきたわけではなかった。わたしなどは、80年代初期にカリフォルニア大学大学院でゲーリー・スナイダー、デイヴィッド・ロバートソン、パトリック・マーフィーたちと出会い、スナイダーやケロワックやウェンデル・ベリーやミュアを読まされ、アンセル・アダムズのヨセミテやアメリカ自然詩の「新しい」読み方を模索していたが、「ネイチャーライティング」や「環境文学」が10年もしないうちに一気に新しいジャンルとして再編成され、エコクリティシズムの登場とともに研究対象として爆発的に拡大するとは夢にも思っていなかったのである。正直に言って、アメリカ自然詩やアンセル・アダムズやジョン・ミュアを読んで大丈夫だろうか、という不安のほうがむしろ大きかったのである。しかし、80年代後半から90年代に入るとこのジャンルに対する関心は急速に拡大し、ASLE-USの誕生、そしてASLE-Jの設立へとつながっていったのである。

ASLE-Jの設立大会に集まった研究者たちの多くは正直に言ってこころの中ではある種の不安をかかえていたであろう。しかし、同時に新しい領域に果敢にチャレンジしていくという勇気も持ち合わせていた。熊本に集まった方々の年齢も平均すれば40代前半から半ばあたり、なんとかなるだろうという楽観的な気分があったように記憶している。日本におけるネイチャーライティング／環境文学研究の確立のためであれば、労を厭わないという雰囲気もあった。だから、次から次へと共同で仕事を進め、仕事を具体的なものにしていったのである。この10年のASLE-J会員による出版物をみるだけでも相当の仕事量であると言っていいだろう。その多くは会員のコラボレーションの成果である。

野田さんをはじめ、高田賢一さん、伊藤詔子さん、そして木下卓さんたちの強力なリーダーシップと会員相互間の真摯な討論、日野啓三さんや石牟礼道子さん、森崎和江さんや加藤幸子さん、そして岡島成行さんの強力なサポートと協力があつた。また、スロヴィックさんやマーフィーさんたちとの国境を越えたコラボレーションなど、多くの方々の協力と努力がいまわたしたちの手にする成果に結びついている。

しかし、わたしはけっしてこれまでの10年を手放しで賞賛しようとしているわけではない。わたしたちの眼前には課題と問題が山積しているからだ。ASLE-Japanの次の10年はどのような展開になるのだろうか。設立時からの会員と、ネイチャーライティング／環境文学を初めから志してきた若い会員たちとの実り多いコラボレーションで、学会の理念を着実に実現していきたいものである。会員全員が個々の研究を充実かつ深化させながら、新しい課題に果敢にチャレンジしていくことを期待したい。■

特 別 寄 稿

ASLE-Japan／文学・環境学会設立10周年を記念して、ユタ州在住の作家テリー・テンペスト・ウィリアムス氏からご寄稿いただきました。ウィリアムス氏は現代アメリカを代表するネイチャーライターであり、文学的スタンスから環境保護運動に取り組むアクティヴイストです。ASLE-Japan 設立間もない1995年3月、環境と文学シンポジウム（後援：讀賣新聞社、於：金沢市）の講師として来日された折には、東京、金沢、広島など各地でASLE-Japan 会員と交流をもたれました。『鳥と砂漠と湖と』（石井倫代訳、宝島社）、『デザート・クアルテット』（木下卓・結城正美訳、松柏社）ほか著書多数。

A Letter To My Japanese Friends

by

Terry Tempest Williams

Right now, at this point in time, I will tell you the question that is keeping me up at night: How do we engage in responsive citizenship in times of terror? I have been thinking a great deal about what I call, "the open space of democracy."

What does the open space of democracy look like?

In the open space of democracy there is room for dissent.

In the open space of democracy there is room for differences.

In the open space of democracy, the health of the environment is seen as the wealth of our communities. We remember that our character has been shaped by the diversity of America's landscapes and it is precisely that character that will protect it. Cooperation is valued more than competition; Prosperity becomes the caretaker of poverty. The humanities are not peripheral, but the very art of what it means to be human. In the open space of democracy, beauty is not optional, but essential to our survival as a species. And technology is not rendered at the expense of life, but developed out of a reverence for life.

In the open space of democracy, we can engage the qualities of inquiry, justice and love as we become a dynamic citizenry. We can possess a liveliness of spirit, a willingness to serve our family, friends, and neighbors in the native landscapes that sustain us.

We seem to have made the mistake of confusing democracy with capitalism and have mistaken political engagement with a political machinery we all understand to be corrupt. It is time to resist the simplistic, utilitarian view that what is good for business is good for humanity in all its complex web of relationships.

I am interested in a spiritual democracy inspired by our own sense of what we can accomplish together, honoring an integrated society where the social, intellectual, physical, and economic well being of all is considered, not just the wealth and health of the corporate few.

To not be engaged in the democratic process, to sit back and let others do the work for us, is to fall prey to bitterness and cynicism. It is the passivity of cynicism that has broken the back of our collective outrage and made it personal. We succumb to our own depression believing there is nothing we can do.

If we cannot begin to embrace democracy as a way of life -- the right to be educated, to think, discuss, dissent, create and act, acting in imaginative and revolutionary ways -- If we fail to see the necessity for each of us to participate in the formation of an ethical life -- If we cannot bring a sense of equity and respect into our homes, our marriages, our schools, and our churches, alongside our local, state, and federal governments -- then democracy simply becomes as John Dewey suggests "a form of idolatry" as we descend into the basement of nationalism.

I do not believe we can look for leadership beyond ourselves. I do not believe we can wait for someone or something to save us from our global predicaments and obligations. I need

[前ページより続く]

to look in the mirror and ask, "If I am committed to seeing the direction of our country change, how must I change myself?"

We are in need of a reflective activism born out of humility, not arrogance. Reflection, with deep time spent in the consideration of others, opens the door to becoming a compassionate participant in the world. We can step forward in times of terror with a confounding calm that will shatter fear and complacency.

To be in the service of something beyond ourselves -- to be in the presence of something other than ourselves -- together -- this is where we can begin to craft a meaningful life where personal isolation and despair disappear through the shared engagement of a vibrant citizenry.

Terry Tempest Williams has written a triptych for ORION Magazine on "The Open Space of Democracy" that will appear in a book by the same title as part of The Orion Society's "Thoughts on America" project, available in August, 2004. These essays can be read in abridged form on www.oriononline.org

日本の友人たちへ

テリー・テンペスト・ウィリアムス

いまこのとき、私が夜も眠れないほど考えている問題についてお話ししたいと思います。それは、恐怖の時代における積極的な市民的行動のあり方に関することです。「民主主義の開放的な場」というものについて、ずっと考えているのです。

民主主義の開放的な場とはどのようなものなのでしょうか。

民主主義の開放的な場には、異議を受け入れる場所があります。

民主主義の開放的な場には、相違を受け入れる場所があります。

民主主義の開放的な場では、環境の豊かさが共同体の財産とみなされます。私たちの特徴はアメリカの風景がもつ多様性によって形成され、その特徴こそ、まさに私たちが護ろうとしているものなのです。協調は競争より価値があり、富めるものは貧しきものを思いやるということ。人文科学は周辺のなものではなく、人間であることの意味をめぐる技法にほかならないということ。民主主義の開放的な場では、美は自由選択されるものではなく、私たちの種としての生存に不可欠なものです。テクノロジーは生命の犠牲の上に成り立つのではなく、生命への畏敬から発展するのです。

民主主義の開放的な場では、活動的な市民となっていく過程で、問うこと、公正であること、愛することの本質との関わりが深まります。精神は生き生きとし、自分を支えてくれる家郷で家族や友人や隣人たちの役に立ちたいと思うのです。

これまで民主主義を資本主義と混同したり、政治的関与を腐敗が明らかな政治組織と取り違えたりしてきたように思います。いまこそ、ビジネスにとって良いことは複雑な関係の網の目にいる人類にとっても良いことだという、単純極まりない功利主義的な見方に抵抗しなければなりません。

私が考えているのは、協調して何かできないだろうかという気持ちから生まれる精神的民主主義です。それは、仲間うちの健康や繁栄だけではなく、すべての者の社会的、知的、身体的、経済的幸福が考慮されるような、統合された社会に敬意を表するものです。

民主主義のプロセスに関与せず、他人任せで自らは手を出さないという態度では、辛辣さと冷笑が深まるばかりです。冷笑に備わる受動性によって、私たちの集団的憤怒は力を殺がれ、個人的な怒りに変えられてしまっています。そして、自分たちにできることは何もないという無力感に屈するのです。

民主主義を生き方として――すなわち、教育を受け、思考し、議論し、創造し行動する権利として、想像的かつ革命的に行動する権利として――受け入れることができないとしたら、また、各人が倫理的な生活の形成に参加する必要性を見いだすことができないとすれば、さらに、地元の人や州や連邦政府はもちろんのこと、家庭や結婚や学校や教会にも、公平や尊敬の感覚を持ち込むことができなければ、私たちは国家主義の基底へ下降し、民主主義はジョン・デューイが示唆するように「盲目的崇拜の一形式」と化してしまうでしょう。

自分たちの他にリーダーシップを求めることができるとは思えません。誰かが、何かが、グローバルな窮境や責務から私たちを救ってくれるとは思えません。鏡に映った自分に向かってこう問わなければなりません――「この国が変わる方向に目を向けるというのなら、自分はどう変わるべきなのだろうか」と。

いま欠けているのは、傲慢ではなく謙遜から生まれる内省的行動です。じっくりと他者のことを考え内省することによって、扉が開き、世界に共感的に参加できるようになります。恐怖の時代に、当惑させるような冷静さをもって不安や自己満足を粉碎し、足を踏み出すことができるのです。

自分たちを超える何かに仕えること――自分たちではない何かを前にすること――ともに――ここを出発点として、活気ある市民という共有関心をとおして個人の孤立や絶望が消え失せていくような意義ある生をつくり出すことができるのです。（訳 結城正美）■

ニューズレターにみる ASLE-Japan の軌跡

2004 年、ASLE-Japan／文学・環境学会は設立 10 周年をむかえました。ニューズレターはこの 10 年、正確には学会設立準備期間を入れて 11 年間、文学と自然・環境の研究をめぐる意見や情報を共有する場として機能してきました。号を重ねるごとに紙幅が増加しているという事実に加え、各号に冠された“ASLE-Japan”に続く日本語名称が、〈設立準備会〉から〈文学・環境研究会〉へ、そして現在の〈文学・環境学会〉へと変化していることに、学会の進展ぶりが端的にうかがえるでしょう。以下、これまでに発行されたニューズレターの内容を振り返り、設立 10 周年の節目に本学会が歩んできた道程を確認しておきたいと思います。

December 1, 1993

ASLE-Japan

Newsletter No.1

第 1 回「ネイチャー・ライティングに関する

会合」（1992 年 11 月 2 日、東京 新宿居酒屋「千草」）についての詳細な報告が掲載されています。代表世話人（後に ASLE-Japan／文学・環境学会初代代表）である野田研一氏、ASLE-US 初代会長で当時フルブライト招聘客員講師として来日していた Scott Slovic 氏をはじめ、参加者は 12 名。（ASLE-Japan の構想が東京のど真ん中で練られていたという事実は、ASLE-US の立ち上げがネオン輝くネウァダ州リノのカジノ街の一角でおこなわれたということと、どこか重なります。）以下、会合での話題を引用します。

(1) 現在、ASLE-US はネイチャー・ライティングを国際的な視野で捉えようとする課題を提起しており、その最初の手がかりが日本における ASLE の設立と交流であること。

(2) 日本でこの分野の研究の促進を図るには、文部省科研費を初めとするさまざまな共同研究プロジェクトを企画する必要があること。

(3) 日本におけるネイチャー・ライティングについて研究する必要があること。

February 20, 1994 ASLE-Japan / 設立準備会 Newsletter Vol.2, No.1

「……昨秋から相談を重ねてきました ASLE-Japan の結成にとって、今年はよい年です。まだまだ検討すべき課題は山ほどありますし、安易に組織づくりだけを先行させても、足場の弱い、たちまち壊れ去る幻に終わる危険があります。焦らず、じっくり取り組んでいきましょう」という書き出しではじまるこの号には、第2回会合（参加者 10 名、1993 年 12 月 11 日、立教大学）について報告されています。会合の話題は、企画進行中のネイチャー・ライティングに関する論文集の内容に関する協議と、S. Slovic 氏を中心とする東京ネイチャーライティング研究会の打ち合わせ。

March 20, 1994 ASLE-Japan / 設立準備会 Newsletter Vol.2, No.2

第3回 ASLE-Japan 設立準備会ミーティング（参加者 14 名、1994 年 3 月 5 日、京都 光華女子大学）の報告が掲載されています。以下、「ASLE-Japan 設立に関する意見交換より」に列記されている意見をいくつか引用します。「従来分散していた作家別研究組織が、自然という共通のテーマで関与できる点が特徴となる」「主題の普遍性から見て、大きな可能性がある」「ひとりひとりが脱領域的になる必要」「Nature Writing というジャンルの存在は、文学という固有領域を不確定にする」「環境問題を介して社会的な発言を行う責任」等。

April 25, 1994 ASLE-Japan / 設立準備会 Newsletter Vol.2, No.3

設立総会を目前に控えた、第4回 ASLE-Japan 設立準備会ミーティング（参加者 13 名、1994 年 4 月 3 日、東京 渋谷 勤労福祉会館）で、

会の名称や会則をめぐって討議された内容が報告されています。ほかに、東京ネイチャーライティング研究会での活動状況、日本におけるネイチャーライティング紹介や翻訳の情報。

September 1, 1994 ASLE-Japan / 文学・環境研究会 Newsletter No.1

「ASLE-Japan / 文学・環境研究会 発足！」という文字が目飛び込むこの号では、ASLE-Japan / 文学・環境研究会設立総会（1994 年 5 月 22 日、熊本大学）での様子が報告されています。設立総会時点での入会予定者は 61 名（うち大学院生 5 名）。研究会発足にあたって野田研一・初代代表から寄せられたメッセージを一部紹介します。「じっさい、スタートはしたもの……今後どのような方向にこの会を進めて行けばいいのか、まだまだ暗中模索の状態です。これは『文学と自然・環境の関係を考える』というテーマの多様性が強い何ものであるに違いありません。多様だからまとめる必要はない、というつもりはまったくありません。ただ、それを性急に『まとめる』ような方向はとらず、むしろそれがいかに『多様』であるかを確かめる作業から始まるかも知れません。……私たちは日本文学の問題を避けて通ることはできませんし、また ASLE の国際化という観点から言えば、私たちが帰属しているアジアという観点も重要になってくると思われまます。私たちが扱おうとする問題は個人の営みとしては手に余るほど大きなものになってくる可能性があります。だからこそ、ASLE-Japan というネットワークが必要なのではないのでしょうか。」他に、「ISLE について」（山里勝己）、「UNR における Nature Writing Seminar」（赤嶺玲子）、「シラバス紹介—北九州大学一般教育科目〈文学と自然〉」（吉崎康博）、この号から始まったシリーズ「現代ネイチャーライターの横顔(1)」の「ロバート・フィンチと鯨」（村上清敏）など。

June 1, 1995 ASLE-Japan / 文学・環境研究会 Newsletter No.2

「Western Literature Association Conference に参加して」(高田賢一)では、第29回WLA年次大会(ユタ大学)での環境文学研究最新動向が報告されています。会場のソルトレイクシティ出身の作家テリー・テンペスト・ウィリアムスが、大会での朗読やフィールドトリップのガイドをつとめたようですが、本号には同作家の来日報告(読売新聞北陸支社・ASLE-Japan 主催「環境と文学シンポジウム」1995年3月31日、金沢市)も収録。さらに、金沢でのウィリアムスのシンポジウム報告“Thoughts on Nature Writing”の冒頭部分も載っています。他に、「N. スコット・ママデイの文学—『夜明けの家』を中心に」(西村頼男)、「シラバス紹介 1—広島大学総合科目〈文化と環境〉」(伊藤詔子)、「シラバス紹介 2—高知大学 アメリカ文化論」(上岡克己)。シリーズ「現代ネイチャーライターの横顔(2)」は、「テリー・テンペスト・ウィリアムスと共感の才能」(石井倫代)。

October 15, 1995 ASLE-Japan / 文学・環境研究会 Newsletter No.3

「Ecocriticism: Storytelling, Values, Communication, Contact」(Scott Slovic なお、このエッセイの日本語要旨はニューズレター4号に掲載)には、エコクリティシズムの特徴と意義がきわめて明解に論じられています。また、コロラド州立大学で開催されたASLE-US 第一回大会関連報告が満載で、大会報告(野田研一)、論文ハイライト(伊藤詔子)、研究発表論文要旨(Bruce Allen、赤嶺玲子)と盛り沢山。他に、“Thoughts on Nature Writing (2)”(Terry Tempest Williams)、「日本環境教育学会シンポジウム報告」(亀井浩次)。シリーズ「現代ネイチャーライターの横顔(3)」は、「自然児リック・バスの動と静」(近江満里子)

April 25, 1996 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.4

この号からASLE-Jの日本語名称が「文学・環境研究会」から「文学・環境学会」に変わっています。第2回総会(1995年10月8日、京都 光華女子大学)で名称変更が了承されたわけですが、それも含め総会での討議とその後に行なわれた第1回研究報告の様子が掲載されています。他に、「シラバス紹介—愛媛大学総合科目〈自然を解読する〉」(木下卓)、「鈴木大拙のエマソン論」(松原郁男)、「日本のネイチャーライティングのための一つの試論—国語科の教材を通して」(亀井浩次)、「時を繕う」(Bruce Allen/近江満里子訳)、“Responsibility Beyond Reason”(C. S. Schreiner)、「郊外にて」(近江満里子)、「ASLE-Japan/文学・環境学会について」(野田研一)。シリーズ「現代ネイチャーライターの横顔(4)」は、「森の女アン・ラバスティール」(上岡克己)。

June 16, 1997 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.5

環境文学研究のメッカ、ネヴァダ州リノの地誌的・歴史的・政治的地図を読み解きながら、ネイチャーライティングを論じた「リノ訪問記—ニュー・ネイチャーライティング」(伊藤詔子)、アメリカを代表するエコクリティシズム批評家2人からの寄稿、「環境文学」(Patrick Murphy/相原優子他訳)と「エコクリティシズムの今後を展望する」(Lawrence Buell/上田都他訳)。ASLE-USとASLE-Japanの共同開催による「日米環境文学シンポジウム」(1996年8月13~17日、ハワイ 東海大学)についての報告(加藤貞通)と発表要旨(赤嶺玲子、石幡直樹、小田島護、若松美智子、加藤貞通、上岡克己、高橋守、矢口以文、結城正美、横田由理)が掲載されています。他に、「ネヴァダ大学リノ校での一年」(結城正美)。シリーズ「現

代ネイチャーライターの横顔(5)」は、「ジョン・ダニエル」(太田雅孝)。

February 4, 1998 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.6

第3回全国大会(慶応義塾大学)発表要旨(Karen Colligan-Taylor、岩井洋、佐藤光重、木下卓、加藤貞通、生田省悟、Bruce Allen、西村頼男、横田由理)。ASLE-US 第2回大会関連報告として、基調パネルスピーチ概要(伊藤詔子)、発表要旨(上岡克己)、ナラティブ・スカラーシップをめぐる感想(結城正美)。洋書、和書、翻訳、テキストに分類された書誌情報 1996~98 は、情報満載です。

February 1, 1999 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.7

エッセイ「Fさんのことー水俣にて」(高橋勤)、ジョージア大学の環境関連カリキュラムを紹介した「UGA 便り」(石幡直樹)をはじめ、「現代ネイチャーライターの肖像ーノーマン・マクリーン」(前川利広)、North American Interdisciplinary Conference on Environment & Community についての報告(山城新)、「シラバス紹介ー青山学院大学 米文学特講」(野田研一)、ジェーン・グドールによる講演会の報告(結城正美)が掲載されています。前号に続き、充実した書誌情報。

July 4, 1999 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.8

ウェスタンミシガン大学で開催された第3回 ASLE-US 大会についての報告「絶望から再生的希望へー失われたものは、今、どこに生きているのか」(渡辺信二、山城新)、第4回 ASLE-Japan 全国大会(1998年10月18~19日、広島)についての報告(村上清敏)、前号に引き続き「UGA 便りーMary Austin の家」(石幡直樹)、Dame Gillian Beer 講演「Waves, Atom, Dinosaur, Woolf's Science」(日本英文学会大会特別講演)の要約(伊藤祐子訳)、

「*Literature of Nature* を読むーエコクリティシズム研究会報告」(辻和彦)、「第1回水俣病記念講演会ー私たちは何を失ったのか、どこへ行くのか」(赤嶺玲子)、「生態地域度クイズ」、書誌情報。

July 15, 2000 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.9

第6回全国大会(京都)プログラムにはじまり、「ISLE 編集過程にみる研究者、教師、そして出版者との関係」(山城新)、「1999年度 ASLE-Japan 第5回全国大会を終えて」(近江満里子)、「トトロの森でネイチャーゲーム&散策ー第5回大会エクスカーション企画」(赤嶺玲子)、「『文学』は『自然保護』の力になるか?ー『藤前干潟』問題を例として」(亀井浩次)、「ASLE Symposium on 'Food and Farming in American Life and Letters' Deemed a Delicious Experience」(Allison B. Wallace)、「エコ・スマート・ホテル」(上地直美)、書誌情報。

March 21, 2001 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.10

山里勝己代表の代表就任挨拶に続いて、ロンドンで開催された ASLE-UK 大会報告(Anna Ford/中西須美訳)、第6回全国大会(京都)をめぐる報告(西村頼男、岩井洋、喜納育江)、「Nature, Culture, Environmentalism」をテーマに掲げた GLASA 学会報告(上地直美)、「*Uncommon Ground* と *Storyteller*」を取り上げた第11回エコクリティシズム研究会の報告(城戸光世)、カリフォルニア大学デイヴィス校「自然と文化」プログラムの紹介(デイヴィド・ロバートソン/豊里真弓訳)、「【特集】鶴見書店テキスト論議はどうなったのか?」。書誌情報の他に書評もあり、トーマス・ライアン著/村上清敏訳『この比類なき大地』(加藤貞通)、ジョナサン・ベイト著/小田友弥・石幡直樹訳『ロマン派のエコロジー』(伊藤詔子)が取り上げられています。

October 22, 2001 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.11

青山学院大学で開催された第7回全国大会の報告(太田雅孝)と加藤幸子氏の特別講演をめぐる報告(佐藤光重)に続き、ノーザンアリゾナ大学で開催された第4回 ASLE-US 大会の報告(Bruce Allen/相原優子・近江満里子訳)、大会報告・補遺(山城新)、参会記(茅野佳子)が掲載されています。他に、ASLE-Japan/文学・環境学会が総力をあげて編集した『たのしく読めるネイチャーライティング』を大学テキストとして使用した授業実践報告(上岡克己)、「エコクリティシズム研究会で *Leap* を読む」(熊本早苗)、書誌情報。

March 20, 2002 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.12

エッセイ「ワーズワスと湖水地方旅行」(小田友弥)、「海との絆—沖縄・泡瀬干潟の保全問題をめぐって」(喜納育江)、ミシシッピ州オックスフォードで開催された ASLE 南部シンポジウム報告(茅野佳子)、「菜食主義の背景を考える—欧米における動物観・生命観について」(関口敬二)、「これから始めようとする人のためのフィールドガイド」(生田省悟)、Alwin Fill & Peter Muhlhauser, *The Ecolinguistics Reader*(2001)の書評(Edward Haig)、書誌情報。

December 10, 2002 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.13

明治学院大学で開催された第8回全国大会報告(生田省悟)、研究発表要旨(加藤宏、大川重郎、浅井千晶)、シンポジウム「アニミズムと文学」要旨(高橋勤、高橋昌子、岩井洋、喜納育江)につづき、目前に控えた ASLE-Japan 主催国際シンポジウムがアジア諸国に目を向けていることに合わせて、〈特集—アジアの環境作家〉が生まれ、韓国、インド、台湾の環境文学をめぐる次のエッセイ

が英日対訳で掲載されています—「韓国の詩人、高銀」(Dooho Shin/山城新訳)、「Arundati Roy と生きることの真の代価について」(Bruce Allen)、「台湾のネイチャーライティング」(Hwoung-chang Liou/山城新訳)。他に、書誌情報。

April 26, 2003 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.14

本号は沖縄で開催された国際シンポジウム—色! 代表エッセイ「国際シンポジウムを終えて」(山里勝己)、全体報告(喜納育江)、ゲリー・スナイダー氏による基調講演「エコロジー、文学、世界の新しい〈無〉秩序」(山里勝己)、シンポジウム1“Nature: Urban, Rural, Wild”要約(山里勝己)、シンポジウム2「アジアの自然と文学」要約(野田研一)、シンポジウム3「環境から何を学ぶか」要約(乳井昌史)、全体的な研究発表についての報告(木下卓、上岡克己)、「フィールドトリップ後記」(山城新)、そして「沖縄本島一周ツーリング」(大神田丈二)。他に、「ネイチャーライターの平和希求について」(伊藤詔子)と書誌情報。また、ASLE-Japan に設立準備段階から精力的に参加して下さった故・石井倫代さんを偲んで、野田研一、Scott Slovic 両氏から追悼文が寄せられています。

November 30, 2003 ASLE-Japan / 文学・環境学会 Newsletter No.15

代表エッセイ「日本における環境文学研究の方向性」(山里勝己)、ボストン大学で開催された第5回 ASLE-US 大会報告(茅野佳子、Bruce Allen)、同大会参会記(飯直子)、「エコクリティシズム研究会で Sherman Alexie の小説、*Reservation Blues* を読む」(塩田弘)、講演会報告「環境と文学のあいだ」(大川重郎)。そして、日野敬三氏追悼文が野田研一氏と巽孝之氏から寄せられています。日野氏は、1995年3月の「環境と文学シンポジウム」(金沢市)をはじめ、96年の「日米環

境文学シンポジウム」(ハワイ)、さらに 97 年の年次大会(慶応義塾大学)に招聘講師として参加していただくなど、本学会にとって

非常に大きな意味をもった作家でした。他に、新刊紹介と書誌情報。■

☆☆☆論文、著書、翻訳の情報をお寄せ下さい☆☆☆

設立 10 周年の節目に、文学・環境をめぐる会員の研究成果を集め、学会ウェブサイトにてアーカイブを開設する予定です。つきましては、これまでにみなさまが発表なさった文学・環境関連の論文、著書、翻訳の情報をお寄せ下さい。とくに論文については執筆者各人からの情報が頼りです。紀要論文も含めて、情報をお願いします。

論文や著書の場合は、執筆者、題名、ジャーナル名/出版社、出版年を、翻訳の場合はその他に原著者名と原題をお願いします。

送付先：山城新 (コンピュータ委員)

〒903-0213 沖縄県西原町千原 1 番地 琉球大学法文学部

E-mail: shiny@ll.u-ryukyu.ac.jp

「センス・オブ・ワンダー」清里フォーラム 2003 に参加して

浅井千晶

山梨県北巨摩郡高根町清里のキープ自然学校で 10 月 27 日から 29 日まで開かれた、「センス・オブ・ワンダー」清里フォーラム 2003 に参加しました。中央本線小淵沢駅から八ヶ岳の東側をまわって北上して小諸駅にいたる小海線で、山間を走る電車に乗ると、見事に色づいた樹木が晩秋の季節感を醸していました。清里駅から徒歩 15 分、キープ自然学校の前には関西で見るともっと鮮やかな朱色のドウダンツツジが植えられ、「センス・オブ・ワンダー」清里フォーラム 2003 の看板が私を迎えてくれました。

プログラムは、鈴木善次氏の基調講演に始まり、シンポジウム「レイチェル・カーソンに学ぶ」、五つのワークショップ、上映会など充実したもので、早朝の散歩や「センス・オブ・ワンダー扇子茶会」といった清里の自然を楽しむ企画もありました。私は「清里の森で上遠恵子とセンス・オブ・ワンダー」と名づけられたワークショップに参加しました。自然の匂いを嗅いだり、千歳茶色、素色(しろいろ)など天然色を探したり、心が「しみじみする色」をイメージして自然の中に探したり、普段あまり意識しない五感をフルに使っての自然体験も貴重なものでしたが、その後、参加者各人が気になる自然物をひとつ探してその事物の 10 日前と 1 年後に思いをめぐらし、さらに自分自身の 10 日前と 1 年後を振り返りかつ想像するワークは印象深いものでした。カーソンの言葉にあるように、自然が繰り返すリフレインには確かなものがあり、その確かさに引きつけることで各人の思いが具体的になるようです。最後に各人の思いの一部を参加者で共有した時、それぞれの思いと自然物とのつながりが密接に感じられました。

もちろん、自然の美しさをただ感じればよいわけではありません。今回のワークショップの一つでも取り上げられたダイオキシン・環境ホルモンの問題を始め、多種多様な問題が身の回りに

生起しているのを見過ごすわけにはいかないでしょう。眠たさに負けそうになりながら二日目の夜に観た長編アニメ映画「夢かける高原——清里の父ポール・ラッシュ」。清里が日本型環境教育発祥の地であると知ってはいましたが、その清里を寒村から現在の姿へと夢と信念、驚異的な実行力をもって作り上げた一人のアメリカ人がいるという事実は、夢をもってもそれを実現できるわけではない、あるいは自分ひとりでは環境に対して何もできないと思いがちな昨今、一人の信念が周囲に大きな波紋をよび、何かを変えられるのだと勇気づけられるものでした。

最終日、朝にはかかっていた霧が昼前に晴れ、遠くに富士山がくっきりと望めました。財団法人キープ協会の厚意で会期中、会場が全館貸切だったこともあり、短期間とはいえ心ゆくまでを自然と環境を意識できるフォーラムでした。■

風景になった夢

北国伸隆

宗教的に言えば、回心したようなものだろう。まるで、聖パウロがみた夢。……

ぼくの夢には、キリストは出てこなかった。

代わりに、荒涼たる風景が出てきた。岩、まばらな木、枯木、一部には霧。色調は全体に青みがかっていて……。いや、いま大事なものは風景の詳細ではない。

その夢に、この肉体をもったぼくは出てこなかった。ただ、そこには風景があった。ぼくは自分がその風景であることを感じていた。深いリアリティとともに、そう感じていた。

見ているぼくが、見られているぼくそのものだった。

現実では不可能なはずの融合が起こったのは、それが夢だったからにはほかならないのだが、夢だったからこそ、ぼくは「見るぼく」と「見られるぼく」（主我と客我、とか、先験的自我と経験的自我、などと呼ぶ人もいる）が溶融してしかも風景そのものであるという、この世のものならぬ「ぼく」を体験できたわけで、……夢の力に感謝している。

ぼくがこの夢をみたのは、十七歳のときだった。まさに、疾風怒濤期。ぼくは高校を中退し、一人で住んでいた。孤独感に苛まれている時期だった。

それだけに、この夢をみたときの至福感は忘れられないものとなった。とり憑かれた、と言っていい。その後の人生が変わってしまったのだ。

夢で体験した至福感を、ぼくは日常生活や旅の中に追い求めるようになった。からだの輪郭が世界へ溶け出しているような写真を撮り歩いたり、中古のボルボで北米の国立公園群を経めぐってあの感覚を呼び戻そうとしたり（あれは風景になる旅だった）、ヨーロッパの辺境や太平洋の

島に新たな展開を求めたりなどしているうちに、……気が付けば、ぼくは小笠原諸島の父島に居付いていたのだ。二〇〇四年の夏で、定住八年間になる。——ちなみに小笠原でのぼくの生業は、インタープリター（多言語間の通訳、ではなく、自然と人の間に立って自然のメッセージを人にわかる形にして伝えることが目的の、一種のネイチャーガイド）や、インターネット中心の広告代理業、それにコンピュータ全般（の雑業）に落ち着いている。……細々としているが、悪人にならなくても生きていけるのはいい。

どう書けば、あの夢の至福感が伝えられるのだろう。

もう二十二年間もぼくはこの課題に取り組んでいるのだ。詩やフィクションの力を借りれば、伝わるのだろうか。それとも……

何か打開策はないのだろうか。とっておきの、秘策は……

ネイチャーライティング（という概念・方法論と未知の作品、それに既知の作品の新たな読み方）に出会い、それが活路になるのではと閃いたのは、小笠原に住み始めてずいぶん経ってからで（つまり人生の中ではごく最近のことで）、いったいぼくは大学や大学院では——あの暇だらけの日々——何を勉強していたのかと、悔やまれるのだった（英米文学に背を向けていたせいかもしれない）。

ぼくが ASLE-Japan / 文学・環境学会に入会したのは、ズバリ、触発を求めてだ。ネイチャーライティングをめぐる研究・実践のプロフェッショナルたちとの交流が、何かよきものをもたらしてくれると期待しているのだ。■

忘れ去られた森林思想家 ——明治期広島のエ業家・八田家の「森林思想」

塩田 弘

豊かな中国山地に恵まれた広島県の森林の 92% は民有林であり、全国で 6 位の民有林面積（松林面積では全国 1 位）、そして全国 1 位の林家数を誇っている。この広島県の南西部、佐伯郡を中心に約 1 万ヘクタールの森林を明治期に所有していた八田家が当時の一林業家にとどまらず、現在にも通用する「森林思想」を受け伝えていたことを知る人は少ない。

元文 4 年（1739 年）、八田家において森林事業が「家憲中第一の事項」としてはじまる。天保 9 年（1838 年）に家業を引き継いだ八田新七信敏（1813-1889）は、森林樹木の栽培方法などを記述した文書を明治 15 年に農商務省山林局主催の山林共進会に出品し、その長男八田謹二郎（1853-1928）が公刊した『林業の方法』では、明治 36 年に第 5 回内国勸業博覧会で一等を授与されている。最後の家督相続者となった八田徳三郎（1871-1935）も、新たな項目を追加して明治 43 年に「森林経営成績書」を書き残している。

これらの文書では、「森林保護ノ効果」と題する章があり、本文中には「森林思想」という言葉がある。また、「目前ノ営利に走り濫伐暴採」する多くの森林所有者のために、気候の調和が

失われ、人間や動物が死滅し、国土が崩壊することを危惧している。「森林経営ノ目的」として、未来の世代に森林を残すことを主張し、そのために森林面積を拡大し計画的な「保護培養」に努めている様子を述べている。地質、地理、生態に関する詳細な記述は現代のエコロジーにも共通するものであり、これが江戸時代から明治初期に書かれている点は注目に値する。歴代の八田家当主が林業で得た利益の多くを、災害地への寄付や学校設営、そして巖島神社等の文化財保護のために使っている点からも、幅広い社会事業の一環として林業を展開していたことが伺える。

山林地主であった八田家は、古くは巖島社領の刀禰として巖島神社の神主家とも関連があったといわれる。八田家の「森林思想」が日本の古い信仰や思想に影響を受けていると仮定すると、それは現代のエコロジスト、ゲーリー・スナイダーにも共通するものであり興味深い。

明治期に最盛期を迎え、二代にわたり国会議員にも当選した八田家であったが、新たにはじめた銀行経営の失敗から没落し、歴史の表舞台から姿を消す。八田家に伝わる古文書の一部は県重要文化財に指定されているが、江戸期から昭和前期にかけての八田家文書約13000点は、広島県立文書館に未整理のまま所蔵されている。今後、歴代八田家当主が残した文書が整理されると、明治期広島の「森林思想」を考察する上で重要な手がかりになるに違いない。■

The Second Tamkang International Conference on Ecological Discourse に参加して

山里勝己

去年の12月5日から6日まで、台湾の淡水大学でThe Second Tamkang International Conference on Ecological Discourse が開催された。わたしは招待を受けて参加し、論文を発表してきた。以下、この学会の概略を報告したい。

淡水大学は風光明媚な淡水江を見下ろす丘の上に建つ大学で、国際的な英文ジャーナル *Tamkang Review* を発行してきたことで知られる大学である。去年で2回目になる国際学会は5月に開催予定であったが、SARSの影響で12月に延期されたのであった。英語と中国語で書かれたものを合わせると全部で31編の研究論文の発表があったが、わたしは中国語を理解できないので英語のみの発表について報告することにする。なお、招聘発表者は英語で発表したけど、そのいくつかは6月に発行される *Tamkang Review* に掲載されると聞いている。紙幅の関係で、ここでは発表者、タイトル、そして全体の様子について触れるにとどめたい。詳細は *Tamkang Review* を見ていただければ幸いである。

以下、発表者とタイトルを列挙する。

基調講演

“Paradise/Pair O’ Dice: Contemporary Characteristics, Counterindications, and the Contingencies of Environmental Justice in Real and Virtual Terrains for Tomorrow’s College Students” Patrick D. Murphy (University of Central Florida)

研究発表

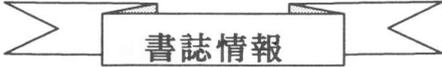
Ursula K. Heise (Columbia University), “Place, Risk and the configuration of the Global in Ecological Discourse”; Refus Cook, “Memory, Repetition, and Aura: The Ecological Ethos in Joy Kogawa’s *Obasan*”; Paul Cilliers (University of Stellenbosch), “The Boundaries of

Complex System and Their Models”; Dong-ho Choi (Chungnam National University), “Life beyond Nature: Ecological Poetry in Korea”; Katsunori Yamazato (University of the Ryukyus), “Establishing a Sense of Place: A Comparative Study of Two Eco-poets, Miyazawa Kenji and Gary Snyder”; Susana Vittandini Andrés and Estela B Sacristán, “Environmental Justice: The Argentine Case”; Robyn Eckersley (University of Melbourne), “Ecocentric Discourses: Problems and Future Prospects for Nature Advocacy”; Patrick D. Murphy (University of Central Florida), “The Non-alibi of Programmatic Utopianism and Wild Variability; or Optimistic Variations on a Science Fiction Theme”; Joni Adamson (University of Arizona, South), “American Studies, Ecocriticism, and the Influence of Place-based Activism in Literature-and-Environmental Studies”; Rosaleen Love (Monash University), “The Twonville Declariton: Global Warming, Coral Bleaching, and Ecological Discourse; Liana Christensen (Australian writer), “Nature Writers Need Big Ears”.

個々の発表を要約する紙幅はないが、基調講演を含めて、全体として environmental justice に対する関心が強く、その概念についての白熱した議論があり、アカデミズムとアクティヴィズムの境界を探ろうとする注意深い討論が印象に残った。

今回の学会は、淡江大学だけでなく、台湾の多くの大学から発表者、参加者があった。台湾における環境問題、環境思想、環境文学への関心の高まりと熱気が感じられ、ASLE-Taiwan の設立についても 2, 3 人の方と話し合った。近い将来に設立されるのではないかと思われる。

.....



書誌情報

高田賢一『アメリカ文学のなかの子どもたち——絵本から小説まで』ミネルヴァ書房、2004.

アメリカでは 19 世紀の児童文学確立期から現在まで多くの作家が子どもをめぐる物語を主要作品としている。「成長過程で子どもはどのような論理と発想を駆使して大人の世界に揺さぶりをかけ、自らのイメージを確立するのか」との視点に立つ本書は、アメリカ児童文学と小説を中心に映画やイギリス作家グリーン、画家ロックウェルの作品批評をも含めた論考集である。20 世紀後半の主要な批評方法を踏まえつつアンダソン、アルジャー、トゥエイン、フォークナー、ボーム等の作品を分析し、カーソンの「センス・オブ・ワンダー」に言及して論を閉じる。多くの論考は講義や学生との議論から生まれたと著者は記しているが『若草物語』論に見るような厚みのある読込みは心を打つ。「読む喜び」という原点を見据えた作品との取組には感性と洞察が感じられる。純文学と児童文学を区分する発想を捨て、国境とジャンルを超えて物語を考察しようとする姿勢は、文学批評の最も新しい一角を捉えて興味深い。(池本佐恵子)

Yosiko Kayano. *Peter Taylor's South: Crossing Boundaries in a "Tennessee Caravan."* ひつじ書房、2004.

アメリカの南部作家ピーター・テイラーに関する英文研究書。著者は日本ではほとんど知られていない「ローカル」な作家にあえて照準をあて、作品を一つ一つ丁寧に分析しながら、南部のテネシー州という狭い世界で暮らす人たちの見えない境界について論ずる。著者は本学会会員で、本書は福原賞(出版助成)を受賞している。(上岡克己)

Daniel J. Philippon. *Conserving Words: How American Nature Writers Shaped the Environmental Movement*. Athens: University of Georgia Press, 2004.

ネイチャーライターと彼らが関与した環境保護団体との関連を取り上げた労作。具体的には、Theodore Roosevelt と Boone and Crocket Club、Mabel Osgood Wright と National Audubon Society、John Muir と Sierra Club、Aldo Leopold と Wilderness Society、Edward Abbey と Earth First! とが論じられている。(上岡)

Terre Satterfield and Scott Slovic, eds. *What's Nature Worth?: Narrative Expressions of Environmental Values*. Salt Lake City: University of Utah Press, 2004.

環境政治の分野で盛んに論じられている環境価値(environmental values)をめぐる問題を、文学的レトリックの観点から検討しつつ、環境政治と環境文学の対話を創出していこうという試み。収録されている 10 余名の作家 (W. Kittridge, S. Ortiz, T. T. Williams, G. McNamee, A. H. Deming など) へのインタビューでは、物語/ナラティヴ`は環境価値とどう関わるのかという問題が論じられる。エコクリティシズムの特徴のひとつである「ナラティヴ`・スカラーシップ」を考えるためのヒントもかなり見付きそうだ。(結城)

岩井洋『国木田独歩——空知川の岸辺で』北海道新聞社、2003.

明治 29 年 9 月、独歩は北海道を旅した。後に『空知川の岸辺で』に結実するこの旅で、独歩は新しい自然との出会いを経験する。著者は「武蔵野」を生み出した源流をこの旅に見出している。北海道の大地と、恋人信子との恋愛を背景に、明治中期の青春の夢と挫折を描いた佳作。著者は本学会会員。(上岡)

10 周年記念全国大会のご案内

手取峡谷



生田省悟 (大会実行委員)

すでにご案内のとおり、ASLE-Japan / 文学・環境学会 10 周年記念全国大会が 9 月 4 日 (土) ~ 6 日 (月)、金沢市で開催されます。本大会では総会、研究発表、シンポジウムの他、会員の上遠恵子氏による講演も企画されています。ゆっくりと親密に語り合うをモットーに、大会期間中は意義深い時間を共有できることでしょう。また、6 日には白山麓でのエクスカージョンも計画中です。プログラムは 7 月下旬にお送りしますが、会員の皆さまのご参加とご協力を改めてお願いいたします。

◆分科会新設のお知らせ◆

エコクリティシズム研究会に続き、ASLE-Jに2つ目の分科会が生まれました。

名称：META サークル (Multitudinous Ecocritical Theory and Approach study circle)

趣旨：文学批評理論としてのエコクリティシズムの特徴や意義について議論する。

既に昨年末より有志が集まり、メーリングリスト上で意見交換や議論をはじめています。

関心のある方はぜひ結城正美までご一報ください

(Tel: 076-264-5819 / 0761-92-3217, E-mail: yuki@ge.kanazawa-u.ac.jp)

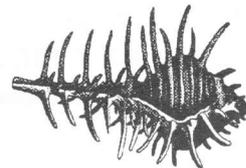
《会費納入のお願い》

ASLE-Japan の運営はすべて会費で賄われています。昨年度会費未納の方は早急にご納入ください。

郵便振替

口座番号：01380-1-56784

加入者名：ASLE-Japan (文学・環境学会)



【訃報】 5月、大川重郎氏(立教大学・院)が急逝されました。ご冥福を祈ります。

【編集後記】

学会設立10周年記念号をお届けします。記念号ということで、ニューズレターの10年をまとめてみました。記念号には、山里代表とテリー・テンペスト・ウィリアムスからメッセージ、また浅井、北国、塩田さんからは有意義な情報をいただきました。ありがとうございました。次の10年にむかって編集委員一同努力を重ねていくつもりです。なお原稿は随時受け付けておりますので、編集委員までお送りください。(K)



【発行】

ASLE-Japan/文学環境学会

事務局：琉球大学 法文学部

山里勝己研究室内

〒903-0213 沖縄県西原町字千原1番地

TEL/Fax: 098-895-8295

E-mail: yamazato@ll.u-ryukyu.ac.jp

【編集】

編集代表 上岡克己

〒780-8520 高知市曙町2-5-1

高知大学人文学部

TEL: 088-844-8197

FAX: 088-844-8249

E-mail: kamioka@cc.kochi-u.ac.jp